

近世初頭の御会和歌書留集

高 梨 素 子

一、はじめに

江戸時代の宮中では御会（天皇・上皇が主催する歌会）が毎月多く開かれた。公家が提出した懐紙・短冊は和歌を披講した後綴じられ、歌の内容は別紙に書留められた。原懐紙は宮内庁書陵部などに今も少数残るが現存数は少ない。懐紙は大判で保存にも見返すのにも不便なためだろう。歌だけ転記されて残された。宮内庁書陵部編『和漢図書分類目録』（昭和二十七、一九五二年・昭和四十七年）には『禁裏仙洞御会和歌』『御会和歌』などの標題で鷹司家、桂宮家、葉室家に伝来した和歌書留が残る。それらは一冊ないし数冊の本が多いが、集成したと思われる大部のものもある。『禁裏和歌御会留』（函架番号、葉九七三）は、歌会一回分ごとに転写され紙の大きさも筆跡も違う書留が複数、慶長から天保にかけて年次ごとに二十四冊に綴じてある。これは書留集の原形を示すと思われる、その後一筆で転写される過程を類推できる。

慶長以前の御会和歌書留集としては『公宴統歌』（三村晃功他、和

泉書院、二〇〇二年翻刻刊行）が知られる。江戸期の御会和歌書留集について従来の研究・紹介等はほとんどなく、わずかに『増訂国書解題』（佐村八郎、臨川書店、大正十五、一九二六年）に『近代御会和歌集目録』（後述の内閣文庫蔵三十冊本と推定される）の奥書と収録御会名が紹介される。また古相正美『近世御会和歌年表』（中村学園研究紀要二七、平成七、一九九五年）はいくつかの御会和歌書留集によって江戸時代の御会年表の作成を試みた。筆者も近世堂上和歌論集刊行会の一員として、当時調査に携わった⁽¹⁾。

書陵部蔵『内裏御会和歌』（函架番号一五二・三八）は慶長十六年より寛永六年の後水尾天皇在世時代の御会の書留であり、拙著『後水尾院初期歌壇の歌人の研究』（おうふう、二〇一〇年）に紹介した。筆者は大部の御会書留集間の書写関係について関心を懐き、今回、書陵部蔵『近代和歌御会集』七十六冊、東京大学史料編纂所蔵『近代御会歌林』三十冊、内閣文庫蔵『近代御会和歌集』三十冊、同『近代御会和歌』二十五冊の四種について調査した。なお、筆者の専門分野は近世初頭であり、紙幅の制限もあるので、前半を中心に検討を行う。また、併せてこれらの御会書留集の意義に触れる。

二、『近代和歌御会集』(書陵部蔵)

目録共七十六冊。函架番号B四・三三。目録だけ大判(縦二十七・六センチ、横十九・六センチ)の袋綴冊子。他の七十五冊は小型本(縦二十一・三センチ、横十五・四センチ)袋綴である。

表紙は後補の茶表紙で、左上に子持ち杵題簽に『近代和歌御会集惣目録、共七十六』と墨書。その下の旧表紙は、白地に金色の松葉模様で題簽はない。第二冊目から本文であり左上題簽に『近代和歌御会集、慶長十九年、一上』のように書く。内側に白地の旧表紙があり、その題簽は左上「御会歌林、慶長十九年、一上」とする。旧題名が『御会歌林』で、後に『近代和歌御会集』と改名されたことが窺われる。本文は全体を通して同筆と思われる。²⁾

目録によれば、第一「千首和歌、慶長十九年(一六一四)」（実は慶長十年催行）から収録し、第九十三の「宝永六年(一七〇九)八月廿三日、新院(東山上皇) 新殿御会始(歌題、寄亀祝)」まで載せる。目録巻頭は「近代御会毎月歌林惣目録」とある。この名称は月次(月例)の禁中・仙洞御会歌を収録した歌の林という意味であろう。

現存するのは第七十六〜第七十九(元禄九年〜十二年の歌会)を収める第七十五冊まで。³⁾最終の歌会は「雪消山色静、元禄十二年(一六九九)正月廿四日禁裏和歌御会始」である。また現在では第七十三・七十四冊(元禄七年五月廿四日〜元禄八年十二月)が紛失している。目録の後補表紙の題簽に「共七十六冊」とあるのは、本冊が現在のように七十五冊で、目録と合わせて七十六冊であることを示すと思われる。

目録の遊紙第二丁めに「惣目録書」として次の内容を記した紙を貼付する。

「慶長十九年上下、外二大永之和歌之冊、元和・寛永・正保・慶安・承応・明暦・万治・寛文・延宝・天和・貞享・元禄・宝永迄、以上全七括六冊也。右、年中毎月御会和歌集、大古写本二御座候。以上。」

この識語は該書の内容を解説するもので別筆であり、後人の書き加えであろう。目録も始めからあったのではなく、後に検索に便利なように付されたと思われる。識語中の七括六冊は七十六冊のことかと思えるが「宝永」までを含むと記す。現在元禄十二年正月までで七十五冊なので、それより数冊多かつたはずで、七括六冊というのが解せない。識語の筆者は本の内容を見たのではなく、目録の記述をみて「宝永」までと記したのだろう。目録を付された時には宝永六年を最後とする内容を持っていたが、識語が記された時点では、最後が紛失し現在のような七十五冊の形であったのだろう。

該書は書陵部の『和漢図書分類目録』によると二条家伝来の本である。二条家は撰家の一つで江戸時代初期には、二条康道(一六〇七〜一六六六)・光平(一六二四〜一六八二)ら歌道を好む人たちがいた。二条康道は寛永十二年(一六三五)に烏丸光広とともに漢詩と和歌を唱和しつつ江戸へ下向し、光広が紀行文『春の曙』を残した。該書は目録によると宝永六年(一七〇九)までを収録するが、この宝永六年は靈元天皇のあとを継いだ東山天皇が中御門天皇に譲位した年であった。このころ歌会の書留を終了したのだろう。二条家では光平の子綱平(一六七二〜一七三二)の時代である。次の桜町天皇の時代まで、歌道は一時期絶えかけていた(盛田帝子『近世雅文壇の研究』二十三

頁、汲古書院、平成二十五年)。歌道が低迷し、御会記録を書き留めることも途絶えたのであろう。

該本は御会の他に臣下である飛鳥井雅章の歌会始を収録する。雅章は中世からの歌道の家である飛鳥井家の人で、兄雅宣の後を継ぎ飛鳥井家を相続し、寛永二十年(一六四三)に参議となり、慶安五年(一六五二)権大納言(四十二歳)となる。明暦三年(一六五七)には堯然法親王、道晃法親王、岩倉具起と共に後水尾院より古今伝受を相伝された。その明暦三年より明暦四年、万治二年(一六五九)、寛文六年(一六六六)〜同十三年、延宝二年(一六七四)、同三年、同六年の雅章亭の歌会始を収録しており、翌延宝七年には雅章が薨去した。雅章がこの時代の歌壇の指導者で注目を受ける歌人であったことを物語り、資料の収集者が雅章に関心を持っていたことを示すものであろう。これは、編纂所本、二十五冊本、三十冊本にも多少の増減はあるが、大体収録される。

又、天和三年(一六八三)・貞享元年(一六八四)・貞享二年にかけては歌会が多い。押小路公起(のち公音)、竹内惟庸、園基福、久我通規、中院通茂、藤谷為教、冷泉為綱、下冷泉為経、今城定経、清水谷実業、庭田重条などの邸宅での十五首和歌会が頻繁にあり、その記録が収録されているが、これらは他の三本には収録されない。

さらに元禄期には靈元上皇の仙洞で元禄二(一六八九)〜四年に月次の聖廟御法楽、元禄三〜五年に月次の玉津嶋御法楽、天満宮御法楽、元禄六〜八年は月次の住吉社御法楽の歌会が行われており、それを収録している。ただ後期の歌会については、触れるにとどめる。

三、『近代御会歌林』(東京大学史料編纂所蔵)

函架番号、押・き・三六。写本三十冊(含目録)、現在は他に副目録(零本)を伴う。浅黄色草花文織り布表紙、小型の本で縦十八・二センチ、横十二・五センチ。見返しは、全体に金泥を塗り、その上に松樹・霞模様を描く。料紙は斐紙、列帖装で装丁もよく、筆跡も公家の手になるものと思われる。印記、(扉)朱長方印「懋哉館図書印」(巻末)黒長方印「御書物方」。慶長十年(一六〇五)の千首和歌(慶長十九年と記す)より元禄五年(一六九二)正月廿四日禁裏御会始(歌題、禁苑春来早)までを収録する。後陽成・後水尾・明正・後光明・後西・靈元と続き、東山在位五年めまでに当たる。

そのあとに、御会歌ではない、次のようなものを共に収録する。これは目録末尾に内容を記す。○法皇菊にそへて聖護院とのへ贈答御製、○烏丸大納言光広卿紅葉の歌贈答、○法皇茸狩の時、板倉周防守拝領御製、○後西院の玉の銘御製、○法皇より江州永源寺へつかはさる、御硯御製、○法皇より桐江に被下和韻の御製、○女院御所にて中院通村源氏物語談話の時女院御製並び贈答歌(元和八年、一六二二)、○中院通村武家より勤事の時被下法皇の御製并通村歌(寛永十二年、一六三五)、○烏丸光広大学寺滝の跡みしときの詞、○同卿撰津国こそべみしときの歌(清濁私)、○同卿細川玄旨丹後田辺籠城のとき贈答の歌(慶長五年、一六〇〇)、○同卿奥州正宗宅にての和歌、○同卿角田川の和歌、○同卿ある女中の贈答和歌、○同卿尺八の銘の和歌、○細川幽齋靈夢の和歌、○後陽成院崩御の時後水院(マ)の御追悼(元

和三年、一六一七)、○同御時烏丸光広卿のいたみ并法華経巻頭和歌、○同御時水無瀬氏成卿いたみ五十首和歌、○台徳院殿贈太政大臣御一周忌に光広卿長歌、○家光公御薨去の時法皇より女院へ贈り給ひし御製、○東照大権現御十三廻忌に法皇御製、○後光^(マ)院崩御のとき後水^(マ)院の御製(承応三年、一六五四)、○新中納言の局逝去の時法皇御製、○水無瀬氏成室逝去の時中院通^(マ)いたみ、○陽光院の三回忌追善、細川玄旨歌(天正十六年、一五八八)、○一品宮智仁親王の追悼、烏丸光広詞、○蜂須賀阿州の息女悼の詞、細川玄旨、○太閤秀吉公哀傷の歌、細川玄旨返歌、○飛鳥井雅章卿吉野山の記、○中院通村関東下向の紀行、○烏丸光広卿東路紀行、○細川二位法印玄旨陳東紀行、○水無瀬兼豊朝臣(一六五三〜一七〇五)東の道の記、○小笠原内匠頭長勝(一六四六〜一六八二)の道の記(以上三十五点)。

慶長・元和ころの細川幽斎・烏丸光広・後水尾院関係のものが多く、書陵部本巻頭の後陽成院御宇の歌より少し時代が下がる。それに宝永ころの水無瀬兼豊・小笠原長勝の紀行を付加する。歌人が個人的な興味で書写したものを共に付加したと思われる。

この書の日録の巻頭には次のような識語を貼り紙で付す。(以下引用資料の清濁私)

「近代御会歌林、三十冊、凡紙数二千五百枚余。この歌書は慶長十九年の千首の御会よりこのかた元禄五年正月まで禁裏たびくの御会、御月次の和歌、その外詩歌などまでかきのせ申候。これをよくく詠吟すれば、近代の和歌之風体こゝろえられ候よしにて、堂上がた歌道御すきの御かたぐは、座右のものとなされ、御覧の御ことに候」

元禄五年正月までの現行の姿に集成されたものに付された識語であ

り、該書の分量、その価値を記す所からは、旧蔵者の押小路家から手放される時に、売却などのための評価として記されたものかと思われる。紙数を記すのは珍しく、計測が困難と思われるが、各冊末に墨付き丁数を書くのでこれを集計したのだろう。

該本は史料編纂所で押小路家本として扱われる。編纂所の所蔵史料目録データベースによると、「押小路家は三条西実条(一五七五〜一六四〇)の孫公音(一六五〇〜一七一六)を始祖とし、家禄は百三十石、明治十七年(一八八四)に子爵を授けられた。(略)大正末年寄贈」とある。第二九冊表紙に「押小路公亮本」の付箋様の貼り紙がある。押小路公亮は押小路家九代。天保十二年(一八四一)生、明治三十四年(一九〇一)没。

ところで、現存本は糸切れにより紙が離れ、他冊と合体して錯簡を生じている。調べたい歌会がどの冊に収録されているか把握しやすいように錯簡の調査結果を記す。現存の冊数を挙げ収録歌会の内容を催行日時で示した。括弧内の和数字は題簽に記す番号である。錯簡が生じている箇所を※で記し、○数字で、正しい順序を示した。

- 第1冊(一之上) 慶長一九・一〇禁裏千首和歌御会、春〜冬①
- 第2冊(一之下) 同、恋〜雑②
- 第3冊(二) 元和一〇・正・二九、寛永二七夕、寛永三行幸、寛永四・三・二四、智仁十五首、幽斎十五首、沢庵百首秋「擣衣」途中まで③
- ※[錯簡]天和二・二・二二〜天和三・三・七②③
- 第4冊(三) 寛永二〇・正・一九〜正保四・二・二五⑤
- 第5冊(四) 正保五・正・一二〜慶安五・二・一〇⑥

- 第6冊 (五) 承応元・一〇・四〜明暦二・八・一五 ⑦
 第7冊 (六) 明暦二・八・二四〜明暦三・二・二五 ⑧
 第8冊 (七) 明暦三・三・二七〜万治二・二・二二 ⑨
 第9冊 (八) 万治二・二・二五〜寛文二・六・二五 ⑩
 第10冊 (九) 寛文二・七・七〜寛文四・六・二五 ⑪
 第11冊 (一〇) 寛文四・一〇・七〜寛文五・一二・一二 ⑫
 第12冊 (一一) 寛文六・正・一九〜寛文六・九・一三 ⑬
 第13冊 (一二) 寛文六・一〇・一四〜寛文七・九・一三 ⑭
 第14冊 (一三) 寛文七・一〇・二四〜寛文九・十・一四 ⑮
 第15冊 (一四) 寛文九・閏一〇・一四〜寛文一〇・五・四 ⑯
 第16冊 (一五) 寛文一〇・五・二四〜寛文一二・二・二四 ⑰
 第17冊 (一六) 寛文一二・三・一九〜延宝二・六・二二 ⑱
 第18冊 (一七) 延宝二・六・二五〜延宝四・正・一九 ⑲
 第19冊 (一八) 延宝四・正・二二〜延宝五・一〇・二四 ⑳
 第20冊 (一九) 延宝六・正・一九〜延宝八・二・一八 ㉑
 第21冊 (二〇) 天和元・一〇・二七〜天和二・二・一六 ㉒
 ※〔錯簡〕元禄三・正・一一〜元禄五・正・二四 ㉓
 第22冊 (二二) 天和三・三・一六〜天和三・一二・二九 ㉔
 第23冊 (二三) 天和四・正・二四〜貞享二・六・二五 ㉕
 第24冊 (二四) 貞享二・七・七〜貞享三・二・二五 ㉖
 第25冊 (二五) 貞享三・五・一九内侍所法楽千首の第二「猿」〜第
 五終 ㉗
 第26冊 (二六) 千首第六〜千首第一〇「春雨」 ㉘

※〔錯簡〕飛鳥井雅章「吉野山の記」途中から〜小笠原長勝海

路紀行 ③⑤

第27冊 (二五) 貞享四・二・一四〜貞享五・二・五 ③①

第28冊 (二六) 貞享五・二・一〇〜元禄二・正・二五 ③②

※〔錯簡〕沢庵百首秋「黄葉」〜終・沢庵十五首・光広十五首・

隠岐奉納二十首・法華經二十八品和歌・仙洞三十六番歌合・

寛永一六年七夕通村七首・寛永一六年重陽通村九首 ④

第29冊 (二七) 貞享三・五・一九内侍所法楽千首始め〜第二「旅」 ④

②⑦

※〔錯簡〕千首第一〇「若草」〜千首終、貞享三・九・六 ③①

③②

第30冊 (目録) ③③

副目録 (函架番号押・き・45)、「法皇菊にそへて聖護院殿へ贈答御製」

〜飛鳥井雅章「吉野山の記」途中まで※ ③④

錯簡はあるものの、目録にある歌会はすべて存在する。

四、『近代御会和歌』(内閣文庫蔵)二十五冊本

函架番号二〇一・九七。写本二十五冊。褪色しているが本来紺色と

思われる表紙。左上に題簽『近代御会和歌^{第一}』のように記す。料紙

は楮紙で袋綴。縦二十七センチ、横十九・四センチ(第一冊で計測)。

第一冊は七十三丁。該書には目録はない。印記は扉または一丁表に「書

籍館印」朱正方印、「浅草文庫」「和学講談所」子持ち枠、朱長方印、

「日本政府図書」朱正方印の四種類が全冊に押捺される。「和学講談所」

は塙保己一が寛政五年（一七九三）に創立した国学研究所で、明治五年孫の忠韶から和学講談所蔵書が書籍館に献納された。書籍館は明治五年（一八七二）に文部省が開いた最初の公開図書館で、二年で廃止の後、同七年官立の公開図書館浅草文庫となり、明治十四年閉鎖、蔵書は大部分が内閣文庫に引き継がれたという。〔内閣文庫蔵書印譜〕改訂増補版、一九八一年、国立公文書館〕

収録内容は、元和十年（一六二四、寛永元年）正月十九日禁裏和歌御会始（歌題、柳臨池水）を始めとして、二十五冊末の貞享四年（一六八七）卯月十七日禁中（東山天皇）御代始御会（歌題、禁庭松久）まで、六十三年間に渡る歌会の歌が記される。後水尾・明正・後光明・後西・靈元と五代の天皇にわたり、靈元天皇の退位された年までの記録である。原則的には催行年時順に配列されるが順不同で乱れる箇所もある。御会始の官位表記は類似のものが列記されるが、これを棒線によって省略して書く所がある。全体の目録はなく、各冊の扉にたとえば「元和十、正、十九ヨリ寛永廿一、二、廿二日迄」（第一冊）のように記す。また、卷七に御会和歌ではないものを収録する。その内容は、1 近江八景の和歌、2 修学院八景詩歌（万治二年、一六五九）、3 飛鳥井雅章・難波宗量関東下向時詠（寛文三年、一六六三）、4 尚法親王・春斎漢詩贈答、5 易然集、6 法雲院前亜相泰翁（烏丸光広）大居士三十三回忌追善歌（寛文十年）経文題三十首、7 点取十首和歌（通茂・弘資・資慶）（寛文九年御当座として三十冊本に記載）、8 烏丸光広卿東路記、寛永十二年（一六三五）、9 飛鳥井雅章卿吉野記、10 水無瀬兼豊朝臣東路の記（延宝九年八月、一六八一）、11 新院御所御連歌（寛文六年三月）後西院・烏丸資慶ら、12 新院御所御連歌（寛文六

年三月一三日）後西院・烏丸資慶ら、13 寛文十一年十一月二十九日於新院御所御興行漢和連句、後西院・道晃法親王ら、14 寛文十三年八月十五日新院御所漢和連句御会、後西院・靈元天皇ら、15 延宝三年九月十三日於仙洞御会和漢連句、後水尾院・後西院らである。紀行、漢詩、後西院の連歌、漢和連句が目を引く。

編纂所本にも共通する8、9、10の紀行を含むが、全体的に、寛文ころの後西院関係のものが多し。連句を収録するのが異例である。二十五冊本祖本作成者の関心がこれらに向かっていたことを類推させる。

奥書は享保三年（一七一八）の書写奥書が、四箇所にある。十六冊末・二十二冊末では「右本書之通書写之。令校合、相違無之者也。享保三年菊月日、信一妻佐世」の同文のものを書く。二十三冊末では「右本書之通書写之。令校合、相違無之者也。享保三年菊月日、佐藤氏藤原信一、家室橘氏女、佐世」とあり、文面は同じだが、署名が少し異なる。二十三冊末のものが正式な書き方であろう。また二十一冊末には「右本書之通書写之。令校合、相違無之者也。享保三年菊月日、佐藤氏藤原信一」とやはり文面は同じで夫の署名がある。筆跡は「也」の字体が佐世のものとして少し異なる。佐藤信一ならびに佐世については未詳。

いずれも享保三年（一七一八）に書写を行い、校合して間違いのないことを確かめたという内容の書写奥書であり、夫婦で書写を行ったと考えられる。全体は同筆ではないが統一した表紙・題簽の形態であり、ほぼ同時期に分担して書写したものと考えられる。

奥書が四箇所に分担されるのが妙である。推測であるが、書写を十六冊末（寛文十一年まで）、二十一冊末（延宝五年まで）、二十二冊末（延

宝八年まで)、二十三冊末(天和二年まで)で打ち切ろうとして奥書を一度記しながら終了せず、結局第二十五冊(貞享四年四月まで)を書いたのだろうか。親本が編纂所本系統とすれば元禄五年までである親本を貞享四年四月東山天皇の御代始御会で筆を留めた可能性がある。和歌の活動の盛んであった靈元天皇が貞享四年三月で讓位したので、そこで筆をとどめたのか。二十五冊末に奥書のない理由は不明。

享保三年に藤原信一・佐世が転写し、おそらく塙保己一(一七四六〜一八二一)の収書作業により和学講談所に収められたと思われる。

五、『近代御会和歌集』(内閣文庫蔵) 三十冊本

函架番号二〇一・九八。写本三十冊。浅黄色地に茶刷毛染めの横縞模様の表紙。左上に黒子持ち枠の題簽で『近代御会和歌集目録 一』、『近代御会和歌集 二』のように記す。第一冊は全体の目録を記すが、第二冊以降も冒頭には該当部分の目録を付し内容を検索しやすい。料紙は楮紙で袋綴。縦二十七・一センチ、横十九・三センチ(第一冊で計測)。第一冊は目録だけで墨付き十七丁、第二冊は墨付き七十六丁(以下略)。印記は扉または一丁表に「大日本帝国図書印」朱正方印、「日本政府図書」朱正方印、「岸藩文庫」朱正方印、「明治十五年購求」赤スタンプ印の四種類が全冊に押捺されている。

内容は、元和十年(一六二四、寛永元年)正月十九日御会始(歌題、柳臨池水)を始めとして、原則的に催行年時順に配列され、第三十冊末は元禄八(一六九五)年二月十三日仙洞御会(靈元上皇)まで、七十三年間にわたる歌会の歌が記される。後水尾・明正・後光明・後

西・靈元・東山と六代の天皇にわたる。東山天皇の在位八年にあたる元禄八年までの記録である。目録に二十三冊とあり親本は二十三冊本であったが、内容量の多い冊(巻之一、同五、同七、同八、同九、同一九)を分冊し、かつ目録一冊を付したために三十冊となった。

奥書は第三十冊末に「近代和哥集者廿三卷、毎年禁裡仙洞多御所御会の写留也。岸和田太守公之所望二而写之。元禄十二年九月十日、小野道範書^{六十歳}」とある。この書は全冊同筆と思われる。小野道範は未詳。「岸藩文庫」印が押捺されるので、岸和田藩の文庫に収納されたと思われる。元禄十二年当時の岸和田藩(和泉南郡岸和田)は岡部長泰(一六五〇〜一七二四)が藩主であった。長泰は歌人・俳人として有名な平藩主内藤義概(一六一九〜一六八五)の女婿に当たるので和歌への関心が深く、公家から歌書を借り、書家に書写させたと思われる。維新後の明治十五年国が購求した。

六、収録歌会数の比較

四本における収録歌会数を概観できる表を第一表とし、歌会の内訳を示した表(紙幅の関係で後光明天皇の崩御した承応三年まで。配列は書陵部本に拠る)を第二表とした。

内閣文庫三十冊本は年時が整然と配列されているので、その収録年時を基準として、書陵部本、編纂所本、二十五冊本の収録歌会数をあわせて記したものが第一表である。目録により作成しており、同一の歌会が誤記などで違う年時に紛れ込む場合もあるので、厳密とはいえないが、大体の目安にはなると思う。また年時不明のものもあるが収

録箇所収めている。

収録歌会数は書陵部本が圧倒的に多く長期に渡っている。三十冊本は寛永から延宝三年ころまでを多く収録し、編纂所本・二十五冊本は後水尾院崩御の延宝八年ころまでを多く収録する。細かく見て行くと編纂所本・二十五冊本は寛永年間では歌会の収録が少ない点で類似する。寛永二十年からと、正保五（慶安元）年からとでは四本がほぼ同様の歌会数を収録する。慶安五年（承応元年）⁽⁴⁾からは、書陵部本と二十五冊本が多く、三十冊本と編纂所本が少ないが、これは承応二年の褒貶和歌八回分を後者が収録しないためである。このことについては後述。また、寛文五年六年ころは歌会数は計五十を数えるが、編纂所本、二十五冊本、三十冊本も、ほぼ同数を収録している。その時期の歌会について抄出者の関心が高かったことを示すものがある。このころ、新院則ち後西上皇は月次で二首歌会と同日の当座廿首歌会を開いている。こうした盛んな歌会活動は寛文九年まで見られる。元禄二～八年に書陵部本では歌会数が多いのは霊元上皇が月次で聖廟法楽、玉津嶋社法楽、天満宮法楽、住吉社法楽などを行ったためであるが、他本はそれほど収録していない。

第1表 収録歌会数

収録歌会の年時		内閣 30 冊	書陵部本	編纂所本	内閣 25 冊	備考	
1614	慶長 19		0	1	0		
	年時不明など（巻頭）		0	11	7		
1624	元和 10（寛永 1）～	巻 1	31	42	7	5	寛永 7 明正即位
1643	寛永 20～	巻 2	18	21	20	18	寛永 20 後光明即位
1648	正保 5（慶安 1）～	巻 3	21	23	22	20	
1652	慶安 5（承応 1）～	巻 4	28	40	28	36	承応 3 後光明崩御
1655	承応 4（明暦 1）～	巻 5	29	43	31	17	明暦 2 後西即位
1658	明暦 4（万治 1）～	巻 6	28	40	27	20	
1661	寛文 1～	巻 7	33	37	35	31	寛文 3 年霊元即位
1665	寛文 5～	巻 8	53	54	51	51	
1667	寛文 7～	巻 9	63	64	36	36	
1669	寛文 9～	巻 10	28	29	9	9	
1670	寛文 10～	巻 11	26	55	43	41	
1673	寛文 13（延宝 1）～	巻 12	32	53	51	51	
1676	延宝 4～	巻 13	19	48	37	34	延宝 8 後水尾崩御
1681	天和 1～	巻 14	19	32	15	15	
1683	天和 3、1 月～	巻 15	19	33	17	9	
1683	天和 3、6 月～	巻 16	16	38	16	2	
1684	天和 4（貞享 1）～	巻 17	16	72	8	9	
1685	貞享 2～	巻 18	19	56	20	2	貞享 2 後西崩御
1686	貞享 3～	巻 19	5	27	5	0	
1687	貞享 4～	巻 20	17	52	16	2	貞享 4 東山即位
1689	元禄 2～	巻 21	17	114	6	0	
1692	元禄 5～	巻 22	23	72	3	0	
1694	元禄 7～	巻 23	9	82	0	0	
	元禄 9～宝永 6 年 8 月		0	179	0	0	
	年時不明（巻末他）		0	0	35	15	
	収録歌会数総計		569	1,318	546	423	

第2表 会名（内閣30冊本・書陵部本・編纂所本・内閣25冊本）番号は各冊始からの順序

年号	年	月	日	禁裏	仙洞	会名	歌題数	歌題	30	書	編	25
慶長	19			禁		千首和歌	1,000			1	1	
大永	1	9	25			月次三首	3	紅葉色々他		2		
						十五首和歌（智仁親王）	15	海上晚霞他		3	6	
						十五首和歌（幽斎、同時）	15	海上晚霞他		4	7	
						百首和歌（沢庵）	100	立春他		5	8	
						十五首和歌（沢庵）	15	山新樹他		6	9	
						十五首和歌（光広）	15	山新樹他		7	10	
						百首和歌（良恕）（歌欠）				8		
						五倫和歌（後水尾院）（歌欠）				9		
						十界和歌（同御製）（歌欠）				10		
						花三十首和歌（同御製）（歌欠）				11		
						富士五十首和歌（是空）（歌欠）				12		
元和	10	1	19	禁		和歌御会始	1	柳臨池水	1	13	2	1
寛永	2	7	7	禁		公宴御会	1	天河雲為橋	2	14	3	2
	2	10				三十首和歌（後水尾伝受時）	30	早春鶯他		15		
	3	9	8			二条御城行幸御会	1	竹契週年	3	16	4	3
	4	3	24	禁		御月次	3	梨他		17	5	4
	4	12	24	禁		御月次	3	早梅他		18		
	7	2	8		仙	御会始	1	鶴伴仙齡	4	19		
	8	1	19		仙	御会始	1	松契春	5	20		
	8	4	6		仙	御当座（若衆稽古）	15	竹亭夏来他	6	21		
	9	1	19		仙	御会始	1	水樹多佳趣	7	22		
	10	10				石清水法楽（光広）	100	立春他		23		
	13	1	10		仙	御会始	1	霞添山気色	8	24		
	13	7	22		仙	御会	1	朝見草花	9	25		
	13	7	22		仙	御当座	20	早春鶯他	10	26		
	13	9	13		仙	詩歌御会	1	池上月	11	27		
	13	10	20		仙	御当座（御統歌10名）	100	立春他	12	28		
	13	11	16		仙	御当座（18名）	200	立春他	13	29		
	14	1	12		仙	御会始	1	南枝暖待鶯	14	30		
	14	3	3		仙	仙洞御着到	100	立春他		31		
	14	3	3		仙	御着到（烏丸光広）	100	立春他		32		
	14	3	3		仙	御着到（飛鳥井雅庸）（慶長7年）	10	立春他		33		
	14	3	22		仙	詩御会（三夜御遊御当座）	50	待花他	15	34		
	14	8	22		仙	御当座	30	初秋露他	16	35		
	14	8	23		仙	御当座	18	新秋他	17	36		
	14	9	13		仙	御当座	20	九月十三夜他	18	37		
	14	9	30		仙	御当座	20	立春風他	19	38		
	15	2	22			後鳥羽院隠州御陵奉納	20	早春他		39	11	
						法華經二十八品和歌	27	序品他		40	12	
	15	9	13		仙	詩歌御当座	30	十三夜晴他	20	41		
	16	1	9		仙	御会始	1	春風春水一時来	21	42		
	16	1	9		仙	梅見御会	30	初梅他	22	43		
	16	3	14		仙	詩歌御会、御当座	29	初見花他	23	44		
	16	3	27		仙	御当座	1	牡丹	24	45		
	16	7	7			七夕七首和歌（通村）	7	七夕月他			14	
	16	9	9			菊九首和歌（通村）	9	菊映月他			15	

年号	年	月	日	禁裏	仙洞	会名	歌題数	歌題	30	書	編	25
寛永	16	9	28		仙	仙洞御夢想披和歌（聖廟）	31	早春鶯他	25	46		
	17	1	17		仙	御会始	1	風光日々新	26	47		
	18	1	11		仙	御会始	1	雪消山色静	27	48		
	18	1	19	禁		御会始	1	禁苑春来早	28	49		
	18	5	19		仙	御当座（若き衆稽古）	15	海辺霞他	29	50		
	18	5	22		仙	詩歌御会、御当座	48	暁余寒他	30	51		
	18	10			仙	三十六番歌合	3	冬天象他		52	13	5
	19	1	23		仙	御会始	1	為君祈世	31	53		
	20	1	19	禁		御会始	1	緑竹年久	32	54	16	6
	20	4	24	禁		月次（御統歌）	100	歳中立春他	33	55	17	7
	20	11		禁		新帝御代始御会（書拔）	1	松添栄久	34	56	18	8
	21	1	19	禁		御会始	1	若菜知時	35	57	19	9
	21	1	23		仙	御会始	1	春到管絃中	36	58	20	10
	21	2	22			水無瀬宮御法楽	20	鶯知春他	37	59	21	11
正保	2	1	28	禁		御会始	1	梅近聞鶯	38	60	22	12
	2	2	22			水無瀬宮御法楽	20	初春他	39	61	23	15
	2	2	25			聖廟御法楽	50	子日他	40	62	24	13
	2	3	16		仙	仙洞御会始	1	藤花久盛	41	63	25	14
	2	10	3	禁		御当座	10	初冬他	42	64	26	16
	3	1	19	禁		御会始	1	毎山有春	43	65	27	17
	3	2	25			聖廟御法楽	50	子日他		66		
	3	3	4		仙	御会始	1	池水似鏡	44	67	28	18
	3	8	9	禁		御当座	10	菽露他	45	68	29	19
	4	1	19	禁		御会始	1	春風解水	46	69	30	20
	4	1	24		仙	本院御会始	1	遠山如画図	47	70	31	
	4	2	6	禁		御当座	20	早春他	48	71	32	
	4	2	15		仙	御当座（本院）	15	嶺霞他	49	72	33	21
	4	2	22			水無瀬殿御法楽	20	初春霞他	50	73	34	22
	4	2	25			聖廟御法楽	50	子日他	51	74	35	23
	5	1	12		仙	御会始	1	残雪半蔵梅	52	75	36	24
	5	1	19	禁		御会始	1	鶴馴砌	53	76	37	25
慶安	1	9	13		仙	月十三首和歌、仙洞御製	13	九月十三夜他			38	26
					仙	十首和歌、同、年月不知	10	早春霞他			39	
	2	1	17		仙	御会始	1	江山春興多	54	77	40	27
	2	1	19	禁		御会始	1	逐年梅盛	55	78	41	28
	2	2	22			水無瀬宮御法楽	20	朝霞他	56	79	42	29
	2	3	19		仙	御当座	20	早春他	57	80	43	30
	2	6	25			聖廟御法楽（後水尾院）	10	雲外郭公他		81		
	2	9	13			幡枝御幸御会	1	月契多秋	58	82	44	31
	2	9	16			十首御製、幡枝御幸之時	10	不知夜月他		83	45	
慶安	3	1	19	禁		御会始	1	柳臨池水	59	84	46	33
	3	2	22			水無瀬殿御法楽	20	鶯告春他	60	85	47	34
	3	2	25			聖廟御法楽	30	早春霞他	61	86	48	35
	3	4	19		仙	御会始	1	夏祝言	62	87	49	36
	3	4	22	禁		御当座	15	山新樹他	63	88	50	37
	3	5	7		仙	御当座	15	春朝他	64	89	51	38
	3	5	19	禁		院御製	2	寄露恋他	65	90	52	39
	3	7	7			公宴御会	1	星夕涼如水	66	91	53	40

年号	年	月	日	禁裏	仙洞	会名	歌題数	歌題	30	書	編	25
慶安	3	7	7			七夕七首和歌、仙洞御製（歌欠）	7			92		
	3	9				十首和歌、仙洞御製（歌欠）	10			93		
	4	1	11		仙	御会始	1	緑竹弁春	67	94	54	41
	4	1	19	禁		御会始	1	初春祝道	68	95	55	42
	4					読観世音経偈和歌	33	世尊妙相其他	69			
	4	2	11			近衛殿応山一回忌追善	30	未顕真实他	70	96	56	43
	4	10	20		仙	詩歌御会	30	初春朝霞他	71	97	57	32
	5	1	19	禁		御会始	1	霞添春色	72	98	58	44
	5	1	21		仙	御会始	1	梅柳渡江春	73	99	59	45
	5	2	4		仙	御月次点取和歌、通村点	1	梅花久盛	74	100	60	46
	5	3	10		仙	御月次点取和歌	6	春山他	74	101	60	47
	5	3	20			若年衆点取和歌	18	早春他	75	102	60	48
	5	4	10		仙	御月次点取	1	久待郭公	74	103	60	49
	5	5	10		仙	御月次点取	6	心在山花他	74	104	60	50
	5	6	10		仙	御月次点取	1	野亭秋近	74	105	60	51
	5	7	10		仙	御月次点取	5	草花交色他	74	106	60	52
	5	8	10		仙	御月次点取	1	深山見月	74	107	60	53
	5	9	10		仙	御月次点取	6	初秋薄他	74	108	60	54
						仙洞御製、月日不明（慶安元年と同一）	13	九月十三夜他		109		
	5	10	4	禁		御会	1	冬祝言	76	110	61	67
	5	10	10		仙	御月次点取	1	船中時雨	74	111	60	55
	5	10	18		仙	御会	1	松有歓声	77	113	62	68
	5	10	21			若年衆点取和歌	1	落葉浮水	78	112	63	56
	5	11	10		仙	御月次点取	7	夜落葉他	74	114	60	57
	5	12	10		仙	御月次点取	1	逐日雪深	74	115	60	58
						御点取和歌、後水尾院御製	10	早春霞他		116		
						御点取和歌、同	10	故郷梅他		117		
						点取和歌、通茂・弘資・資慶	10	海上霞他		118		
承応	2	1	19	禁		御会始	1	鶯知万春	78	119	64	69
	2	1	23		仙	御会始	1	雪消春水来	79	120	65	70
	2	2				近衛殿家会始	1	水石契久	80	121	66	73
	2	2	10		仙	月次点取	1	梅有遅速	81	122	67	71
	2	5	24	禁		御月次	1	寄道祝言	82	123	68	74
	2	6	1		仙	御月次褒貶和歌	1	水石契久		124		59
	2	閏6	1		仙	御月次褒貶和歌	1	竹風夜涼		125		60
	2	7	1		仙	御月次褒貶和歌	1	野菽露		126		61
	2	8	1		仙	御月次褒貶和歌	1	月不撰処		127		62
	2	9	1		仙	御月次褒貶和歌	1	枯葉漸紅		128		63
	2	9	23		仙	御会	1	菊花久盛	83	129	69	75
	2	10	1		仙	御月次褒貶和歌	1	落葉浮水		130		64
	2	10	27		仙	御当座	20	峯霞他	84	131	70	76
	2	11	1		仙	御月次褒貶和歌	1	寒閨閑霰		132		65
	2	12	1		仙	御月次褒貶和歌	1	霜朝遠樹		133		66
承応	3	1	19	禁		御会始	1	砌松契齡	85	134	71	77
	3	1	23		仙	御会始	1	春風不分処	86	135	72	78
	3	2	6			花町殿八幡宮御法楽	15	霞満山他	87	136	73	79
	3	8	10		仙	太神宮御法楽	20	早春鶯他	88	137	74	72

七、四本の比較

(一) 書陵部本と内閣三十冊本の比較

全体として書陵部本の収録歌会数が圧倒的に多い。寛永期の収録数は書陵部本と三十冊本が類似する。両本の寛永期を比較すると、具体的内容の対照(第二表)を示したが、三十冊本では書陵部本歌会番号15の寛永二年(一六二五)後水尾院の伝受時三十首、23寛永十年光広の石清水法楽百首、31・32・33寛永十四年等仙洞着到和歌、39後鳥羽院隠州御陵御奉納和歌、40法華経二十八品和歌、52三十六番歌合などの、単独詠や普通の御会詠ではないものを収録しない。また17・18の禁中月次(月例)歌会を採らず、書陵部本の形から大きな御会に絞って抜き書きしたと考えられる(逆の考え、すなわち別途所有資料を御会書留の間に入れたという考えも推測としては成り立ち得る)。書陵部本の方は歌会末の読師・講師などの表記が残っていることが多く内容が良い。三十冊本は転写を多く経ているものと思われる。

三十冊本のみにある独自掲載歌は、三十冊本の歌会番号69の読観世音経偈和歌三十三首(慶安四年、一六五二)である。これは「世尊妙相具」から「是故応頂礼」までの観音経の経文句題三十三題を道謙法師・左兵衛督源高氏(足利尊氏)・源直義朝臣らが詠んだものである。時代的にも近世から外れるものである。巻末に識語があり、「右之写、飛鳥井亭二而披見故、則令書写了」(右の写し飛鳥井亭にて披見ゆえ則ち書写せしめおわんぬ)とあり、慶安四年正月十九日禁裡御会始と、慶安四年四月十一日近衛前関白信尋公一廻忌三十首和歌の間に配置す

る。慶安四年に、これを飛鳥井亭で目にした人が書き写し挿入したと思われる。三十冊本祖本が書陵部本系統から抜き書きされたこととすると、その後で足されたことになる。

典拠資料の同一性を検証するために、資料の細かい点をのちほど検討する。

(二) 書陵部本と編纂所本との比較

書陵部本・編纂所本は次の点で類似している。第一は始めに千首和歌から収録しており、本来慶長十年の催行であるのを共に慶長十九年と表記すること。第二は書陵部本の巻頭にある年時不明歌十一のうち、智仁親王十五首などの五点を同じ位置に収録していること。書陵部本ではそのあとの五点が目録にあるも実際には紛失しているもので、紛失後に編纂所本(祖本)に書きされた可能性もあろう。第三に歌書名に『御会歌林』と類似の語を含むことである。

編纂所本が書陵部本の形から抜き書きされたと思われるが、編纂所本の歌会番号14七夕七首和歌と15菊九首和歌、また38慶安元年九月十三夜月十三首と39仙洞十首和歌(年月不知)のように書陵部本にないものをどう考えたら良いか。後者については書陵部本109と116が該当歌会であることがわかった。書陵部本の祖本にはあったが、現在の書陵部本に至る転写過程で年号が不明となり別の箇所収録されたものと思われる。14・15は通村の歌だけなので、御会の記録としてではなく、別に入手し付加された可能性もあろう。

両本の目録の書き方には微妙な異同があり、一方を忠実に転写するものではなく、目録はむしろ別途に作成された可能性がある。

例(書陵部本) 柳臨池水、禁裏和歌御会始、元和十年正月十九日

天河雲為橋、公宴御会、寛永二年七月七日

竹契退年、二条御城行幸御会、寛永三年九月八日

(編纂所本) 柳臨池水、禁裏御会、元和十年正月十五日

天河雲橋、禁裏御会、寛永二年七月七日

竹契退年、二条行幸御会并御着座之図、同三年九月八日

日

など傍線部に微妙な異同があるが、類似している。参考までに三十冊本の目録の書き方を挙げると、

(三十冊本) 禁中御会、元和十年正月十九日、題柳臨池水

七夕御会、寛永二年七月七日、題天河雲為橋

二条御城行幸御会、寛永三年九月八日、題竹契退年

とあって、御会の種類、催行年時を先行させている。全部を通じての統一した形式なので、目録作成時点で、歌題例としてよりも、歌会名に関心が高かったことを物語る。書陵部本と編纂所本の類似、三十冊本の相違が目立つ。

書陵部本では天和三年(一六八三)五月十七日公起(のち公音と改名)朝臣亭内会、貞享元年(一六八四)十一月二十四日押小路亭内会、貞享二年八月二十三日押小路亭当座などが収録されるので、書陵部本(祖本)の所蔵者は押小路公音と交流があったと考えられる。編纂所本(押小路本)は良質な料紙で列帖装の装丁であり、筆跡は流麗な書体である。公音により書陵部本(祖本)から書写された可能性があると思われる。元禄五年(一六九二)の禁裏御会始までの収録であり、その頃書写されたであろう。公音は元禄十三年に五十一歳で参議となり、正徳六年(一七一六)に六十七歳で薨去した。

(三) 編纂所本と内閣二十五冊本の比較

編纂所本と内閣二十五冊本を比較すると、二十五冊本は元和十年から続いて四つの同じ歌会を収録する。また寛文五年六年など収録歌会数(収録内容も一致)が一致する例が見られて関係性が感じられる。編纂所本の形から抜き書きされたと思われる。

問題となるのは、承応二年(一六五三)の褒貶和歌であり、これが編纂所本になく、二十五冊本にあることである。褒貶和歌は、歌人達に互いの歌について批判し議論させて、研鑽を計った試みである。承応二年六月より十二月にかけて八回、月次で催された。良仁親王(後の後西天皇)、道晃法親王、飛鳥井雅章、正親町実豊、烏丸資慶、園基福、小川坊城俊広、徳大寺実維、勘解由小路資忠、飛鳥井雅直の十人が参加した。

現在の編纂所本の形から、二十五冊本が書写されたのではないことになる。編纂所本の祖本において、これを収録しており、そこから二十五冊本の祖本が写されたと考えるか、あるいは、この書は有名であった単独で流布しているので、それが合体したと考えるか、二十五冊本の書写過程の問題としてとらえることができよう。

八、資料の細部の検討

四本における各歌会の識語などを比較してみると、次のような事例が見られる。

①寛永三年の二条城行幸御会では、三十冊本では巻末に良光「秋津洲の外まで御代を祝ふ哉かはらぬ竹をつきぬためしに」を載せる。これ

は智恩院良純親王の歌であるが脱落し、次順の道晃法親王の「よ、かけて」の歌が良純の歌とされ、この歌は作者不明歌として良光名で付記されたのである（拙著『後水尾院初期歌壇の歌人の研究』二七八頁参照）。この御会は単独の写本も多いが、国会図書館『寛永三寅九月二条御所御幸記』（函架番号特一・二〇三四）などでは良純歌の脱落がない。また歌の配列が天皇御製・秀忠のあと、家光は少し後に配されておき、異なっている。これに対して三十冊本・書陵部本・編纂所本・二十五冊本は良純歌を脱落し、また歌の配列順で御製・秀忠・家光を続けて載せる。四本が同じ系統の資料に拠ると考えられる。ただし脱落歌を付しているのが三十冊本だけなのは脱落後の早い時期の形を残しているのだろう。

②寛永十三年九月十三夜於仙洞詩歌会（題「池上月」）は後水尾上皇・信尋・光広・尊純・季継・共房・通村・実顕・雅宣・季吉・氏成・嗣良・為尚・勝忠・具起・為景が参加している（三条西実条は不参加）。漢衆として、虔真・定逸・承章・季通・光勝・梵壺などが参加した。この記録の最後に次の識語がある。書陵部本によると、

「右御会、予依^三所^二勞^一不^レ參。御懷紙閉様、飛鳥井中納言雅宣卿相談。次第如^レ此可^レ然^一之由。三条西前内府実条公モ被^レ申云々。詩歌列^{別之}二閉、詩僧俗一^二閉、可^レ然^一之由也。」（訓点私、以下同）

三十冊本は同文であるが「列」に「別カ」の傍記はない。意味は「別」が良いだろう。「右御会に予は所^二勞^一で不^レ參であった。御懷紙の閉じ方は飛鳥井中納言雅宣卿に相談した。閉じ方の順序はこのようにするのが良いだろうとのことだった。三条西前内府実条公もそう言われたということだった。詩歌を別に閉じ、詩では僧衆と俗衆をひとつに閉じ

て良いということである」という内容である。書留の内容を見ると和歌を前半にまとめて書き、後半に漢詩を書き、漢詩は虔真・定逸・承章と並んでおり僧衆と俗衆を分離していない。懷紙がこの識語の通りに配列され閉じられ、書写されたことが窺われる。懷紙を閉じる役目の人が当日欠席し、後に書いたと思われる。たぶん原書留に書かれていた識語で、書陵部本と三十冊本が同一の書留を資料とすることを示す。編纂所本・二十五冊本にはこの歌会は収録されていない。

③寛永十三年十一月十六日於仙洞御当座二百首の末に作者別詠歌数が掲出され、そのあとに、書陵部本「右、一首不足歟、以類本可改之」とあり、三十冊本は「一首不足、以類本可書加」と書く。文が微妙に異なるが、類似性を示すだろう。

④寛永十八年五月二十二日御当座は、暁余寒・道房「さらに又むすはほるらし山かつら暁さむき雪の下草」から始まる詩歌御会である。和衆としては雅陳・道房・堯然・通村・実教・雅章・智忠・実顕・道晃・経広・雅宣・通純・資慶・公業・基音。漢衆としては中達・元良・公景・長純・為景・梵壺・泰重・龍恕・圓旦・永洪・集宣・定矩がいて、両方をよむ後水尾院を含め計二十八名が参加した。書陵部本・三十冊本共に「於小御所、講師為景勤之」の注記と座席図を付す。編纂所本・二十五冊本には収録しない歌会である。座席図は普通あまり書かれるものではなく出席者が個人的に書き留めたものと思われるので、書陵部本と三十冊本は同一資料に準拠すると思われる。

⑤寛永二十年四月二十四日禁中御月次百首和歌御会では、書留の最後に次のような識語がある。

書陵部本「本曰、右百首和歌、以^三或人本^一、令^二書写^一。落字・僻字

繁多也。以^二類本^一重而可^レ加^二一校^一而已^レ（本に曰く、右百首和歌或人の本をもつて書写せしむ。落字・僻字繁多なり。類本をもつて重ねて一校を加ふべきのみ）

編纂所本「右百首和歌、以^二或御本^一、令^二書写^一。落字・僻字繁多也。以^二類本^一重而可^レ加^二一校^一而已^レ」

二十五冊本「本云、此百首和歌、以^二或人本^一、^レ令^二書写^一、落字・僻字繁多也。以^二類本^一重而可^レ加^二一校^一而已^レ云々」

三十冊本「右之百首和歌、以^二或人本^一、^レ令^二書写^一、落字・僻字繁多也。以^二類本^一重而可^レ加^二一校^一者也。此節不^レ校^二一合之^一歟。」（右の百首和歌は或人の本を以て書写せしむといえども、落字・僻字繁多なり。類本を以て重ねて一校合を加えるべきものなり。この節これを校合せざるか。）

内容を見ると、若草の歌（道晃）に落字、暁虫の歌（康道）に上句欠、杜紅葉の歌（御製）に歌欠があることなどを指すと思われる。二重棒線部のような異同が気になるが、親本に類似の注記があったことは同じであり、識語の微妙な異同は転写時に生じたものと思われる。親本においては関係性があつたことを示すだろう。

⑥寛永二十年十一月御会御代始書抜は後光明天皇の即位による御代始御会（題松添栄色）の書留である。御製、康道、道房、尚嗣、貞清、智忠、通村の七名の歌を取録する。この歌会名の書き方を書陵部本では「寛永廿年十一月、新帝御代始御会拔書^{上衆斗}」とある。編纂所本も同様であり、最後は中院通村の「栄べき御代の初の榊葉の霜をも枝にみする松哉^{上衆斗書抜之}」まである。二十五冊本でも「寛永廿年十一月、御代始御会^{上衆斗書抜之}」とあり、通村歌まである。三十冊本では「寛永廿年十一

月御会、御代始書抜」とあり、最後の通村の歌を欠く。

上衆を書き抜いた資料を基としている点で類似する。三十冊本に通村歌がないのは、転写時の脱落であろう。

⑦寛永二十一年二月二十二日水無瀬殿御法楽は、鶯知春・御製（後光明）「宮の内と聞ものどけしはるきぬといふばかり成うくあすのこゑ」から始まり、春・恋・雑を内容とする組題二十首である。里梅花（撰政康道）・野春草（道晃）・暁春月（院御製）・帰雁遥（左大臣道房）・漸待花（実顕卿）・見山花（実秀卿）・花随風（右大将道昭）・苗代蛙（兵部卿宮貞清）・暮春浦（左大将光平）・寄月恋（慈胤）・寄雲恋（無記名、御製）・寄山恋（実教卿）・寄海恋（兼賢卿）・寄舟恋（中務卿宮智忠）・名所松（良尚・旅宿夢（通村卿）・古寺鐘（尊純）・夕眺望（嗣良卿）・寄世祝（為^{三十冊本兼}賢卿）と歌が続く。その最後に中院通純の歌が記され、注記が付される。

（書陵部本）松雪「通純卿」さえかへる春のあらしの山の端に霞は消て雪ぞさやけき（一は改行箇所）

右ノ一首、松雪の和歌不審。法楽之外、証本無。覚書ニかく歟。私曰、此歌松春雪にて可有之歟。（墨で歌も含め全文削除）

（三十冊本）松雪「通純卿」さえかへる春のあらしの山のはに霞は消て雪ぞさやけき

右ノ一首、松雪の和歌不審。法楽之外、証本無。覚書ニ加置歟。（編纂所本）春雪「通純卿」さえかへる春のあらしの山のはに霞のさ^マえて雪ぞさやけき

此歌は右廿首の外なるべし。本のみ、書之。（二十五冊本）松雪^春「通純」さえかへる春のあらしの山端に霞はさえ

て雪ぞさやけき

写本云、右松雪歌不審云々。

転写者は通純歌を不審としたと思われる。水無瀬社御法楽は二十首を基本とするので、通純歌が余分なためである。「法楽之数の外の歌で証本にないものだ。覚え書きとしてかくものか」と識語を付した。私曰く、此の歌、松春雪にてこれ有るべきか」と付記しているのは本文の歌題が全て三首題であることから題の不審を述べたもので転写者の営為と思われる、これが書陵部本にあるのは後に付されたものであろう。

以上、転写の際に生じた相違と見られる点はあるが、準拠資料の相違を疑わせる箇所はなく、四本は同一系統の転写本であると思われる。

九、まとめ

書陵部本は撰家の二条康道・光平らの家に伝来したと思われる、明治維新以後に書陵部に収蔵された。その系統の親本から元禄五年（一六九二）ころ押小路公音により書写されて押小路本が成立したと思われる、大正末に東京大学史料編纂所に寄贈された。編纂所本から抄出書写されて二十五冊本の親本が生まれ、それが享保三年（一七一八）に藤原信一・佐世により転写され、その後塙保己一の和学講談所に入り、明治五年（一八七二）書籍館、同七年浅草文庫を経て、同十四年内閣文庫の所蔵となったと思われる。

また、三十冊本は書陵部本系統から御会詠を中心に元禄八ころ抄出された親本を、元禄十三年に岸和田藩主岡部長泰の所望で小野道繁が書写して岸和田藩の文庫に入り、維新後明治十五年に国に購求され

たと思われる。もと二十三冊が三十冊となった位だから、転写の時点では抄出などは行わなかっただろう。親本は現在と同じ内容で、禁裏・仙洞での年中行事歌会・法楽歌会・月次歌会などの公宴御会を中心に書き留められたものであった。親本が書陵部本から抄出されて成立していたのか、別途に集められていたのか断定できないが、全体としてみれば、収録されている歌会の内容は類似しており、準拠資料も細部で似ているので、書陵部本系統から転写されたのではなからうか。目錄は別時期に付されたものであろう。

このような大部の御会書留集の意義としては、当時の天皇、上皇の歌会活動を窺い知ることができる点である。年中行事的な内裏・仙洞の御会（御会始、七夕、重陽御会）、法楽御会（後水尾院時代は聖廟法楽、水無瀬社法楽、天和や元禄ころの靈元天皇時代には住吉社・玉津嶋社法楽など）はもちろんのこと、月次御会、当座御会などまで、年々の歌会の推移を全般的に見るのには便利である。そして、慶安五年（承応元年、一六五二）には通村の指導による仙洞点取り和歌があり、承応二年には公家同士が毀誉褒貶を行う褒貶御会があり、明暦三年（一六五七）以後飛鳥井亭の会始が収録されるようになり、寛文四年（一六六四）後西院が古今伝受を相伝されたあと、寛文五年・六年・七ころに新院御所で月次歌会を開いて盛んな和歌活動が行われたなどという和歌史の流れを具体的に見ることができる点で意義がある。

注

(1) 『近世堂上和歌論集』（明治書院、一九八九年）に『年表』を収める計画があったが実現しなかった。なお、古相『年表』における内閣文庫所

蔵の二本、E『近代御会和歌集』（三十冊本）とF『近代御会和歌』（二十五冊本）は歌の収録について逆であり、EとFを入れ替えて考えるのが正しい。

(2) 現存の巻頭第一上と巻末第七五冊の冒頭を比較すると「年」の字の縦棒を長く延ばして跳ねるところや、「御会」の字体が似ているように思われた。

(3) 目録と冊子の関係を見ると、目録における歌会のまとまりは、第一・第二などであり、これは各冊の内容と一致しており、題簽上に記載される。冊数との関係を見ると第一・第三だけが上下二分冊になり題簽には「一上」「一下」「三上」「三下」と記す。各冊の内容は題簽七十一の本までは目録と一致する。しかし題簽七十二の本では目録の七十二（元禄七年正月〜三月）の他に第七十三の七歌会（元禄七年四月〜五月十二日）を含み不一致となる。そして、目録第七十三残り・第七十四・第七十五にあたる計五十八歌会（元禄七年五月廿四日〜同八年十二月三日）は現在紛失。目録第七十六・七十七・七十八・七十九にあたる計十一歌会（元禄九年正月九日〜同十二年正月廿四日）を題簽七十五の一冊子とする。題簽七十二は冊数としては七十四冊めなので、題簽七十五を加え全体冊数が七十五冊となる。冊子がまずあり、それを目録に写したが、その後紛失に伴い綴じ直しなどがあつたものか。また、多くの冊で題簽下と最終丁とに墨付き紙数が記されているが、その数に不一致が見られ、古い綴じ直しの痕跡と考えられるが詳細不明。

(4) 慶安五年二月から十二月までの月次点取り和歌八回を三十冊本・編纂所本の目録では一括して一回のように書くが、書陵部本・二十五冊本は分けて書くので、その形で数えた。

（たかなし もとこ／日本文学、中世・近世和歌）